

モンタナ留学報告書

総合管理学部 大谷優美

私は留学前、ある大きな目標を立てました。それはこの留学を、自分を内面的に大きく成長させるためのきっかけにする、というものです。大学に入ってから実家暮らしだった私は、成人式を目の前にしても尚、周りの人に甘えてばかりで、大人の自覚が欠けていました。自分が慣れ親しんでいた場所を離れて全く別の世界に身をおくことで、世間知らずで人に頼り切っていた自分を変えたい、その希望を胸に私は遠くモンタナへと旅立ちました。



10ヶ月間通ったモンタナ州立大学

日本を離れ、サンフランシスコ空港に着いたまさにその日、私のその思いを一層奮い立たせる、忘れられない出来事が起こりました。飛行機を降りてから入国審査のゲートを通過するときのこと。私たち交換留学生は、入国に必要な書類をその場に持っていないという理由から、当局のオフィスに連れて行かれ、3時間も待たされるという事態が起きました。その上、モンタナ行きのこの日の最終便を逃すなど、私たちにとってこの留学は劇的なスタートとなりました。この日を境に、何が起こっても自己責任、自分のことは全て自分で何とかしなくては、と思うようになりました。

学校が始まってからは毎日が戸惑いの連続でした。アメリカでは個人を尊重した風習からか、自分のことは自分でやらなければ、他人は何もしてくれません。最初のオリエンテーションでも、ざっと概要を説明して、「あとは〇〇を見れば分かるから。じゃあ学校生活を楽しんで」と言われ、訳がわからないまま周りの世界だけが動いている、という感覚でした。初めは冷遇されているのだと思い、落ち込みましたが、日が経つにつれて、これはアメリカでは普通なんだ、と思えるようになりました。

授業が始まると、私を悩ませるものはさらに増す一方でした。自主的な発言を重視するアメリカでは、発言をしなければ授業に参加する気がないものと見なされます。最初のうちはちゃんと答えられる自信がなくて、「どうか当てられませんように」と願う自分がいました。また、情報がすべてのアメリカでは、「知らなかった」という言い訳は通用しない、ということも学びました。例えば、学期中に出される宿題はすべて、



パブリックスピーキングの
クラスメイトと共に

最初の授業で配られるシラバスに事細かに書かれているという徹底振りで、知らないのはすべて本人の責任、といった感じです。レポートやグループワーク、定期的なテストを前にして、私は戸惑うばかりでした。そんな私を助けてくれたのは、クラスメイトの存在でした。毎回の授業で顔を合わせる度に仲良くなり、一緒にご飯を食べたり、宿題を一緒にやるようになり、彼らのお陰で授業でも自信を持てるようになりました。また、先生たちも私に配慮してくれ、初めのほうは緊張し

ていた私も、徐々に楽しんで授業を受けられるようになりました。そのときは無我夢中で、とにかくついていかなければという思いが先だって行動していたのですが、今思うとあの頃の自分は人任せではなく、自分から行動したからみんなが助けてくれたのだと感じます。

また、文化の違いの中で、今まで知りえなかった多くのことを学びました。アメリカは生活のすべてが宗教と関わっている、と言っても過言ではないほど、宗教が色濃い社会です。周りにクリスチャンの友達が多かったことから、私も週末と一緒に教会へ行ったり、聖書の勉強を一緒にしたりしました。宗教と共に生きている彼らと同じスペースを共有していると、宗教は不思議なまでに人に力を与える存在である、ということ強く実感しました。その反面、宗教は思わぬ形で人を殺めてしまう存在でもあります。私たちと同じキャンパスに通う友達に、セルビアからの留学生がいました。彼は私と同年でありながら、これまでに2回の戦争を経験しているといいます。この2つの戦争の根本は宗教にあるだけに、彼自身宗教には深い思い入れがあるのだそうです。今まで宗教とは無関係な環境で育ってきた私にとって、この2つの出会いはこれほどまでになく、宗教に対して目を向けさせられた瞬間でした。

留学中はいろんなことへの挑戦の場でもありました。モンタナは日本とは比較にならないほど雪が降るため、行く前からモンタナでは今までやったことのなかったスノーボードに挑戦したい、と思っていました。私が履修できた教科にスノーボードのクラスがあったため、運良くスノーボードに初挑戦することができました。また留学する前



インターンシップでお世話になった人たち

からやると決めていたインターンシップもすることができ、すごく貴重な経験になりました。帰国前には念願だったアメリカ西海岸縦断も果たすことができ、今までで一番過酷な旅ただけに、ロサンゼルスまで無事たどりついた瞬間は感動ものでした。

留学している中で何より一番大切だと感じたのは、身近にいる仲間たちの存在です。この留学を通して、私はいろんな人たちに出会いました。事あるたびに心配してくれたホストファミリー、喜怒哀楽を共に分かち合った留学生、まるで家族のように私を支えてくれた仲間たち。彼らがいなければこのように満ち足りた留学生活を送れることはなかったと思います。5月の夏休みが始まってみんながそれぞれ家に帰るまでの2週間、今までの恩返しをしたいと思い、妹と共に毎晩親しかった友達に夕食を作りました。寮の食堂が閉まっていたため、毎晩10人くらいで食卓を囲み、一緒に賑やかな夕食を食べました。するとある友人が、「私は長い間ずっと、こんな風に食卓を囲む事がなかった。だから最近、ユウミたちのお陰でまるで家族と一緒にご飯を食べているようで、とてもうれしかったよ。」と喜んでくれました。日本にいたときは人に頼り切っていた私が、アメリカで人を喜ばせる事ができ、私自身もうれしかったと共に、自分も人のために何かができるんだという大きな自信にもなりました。



キャンパス内の寮にて

留学中は毎日が驚きと発見の連続でした。異国の地で10ヶ月生活した中で、自分は日本人だというアイデンティティーが日に日に強くなったのを思い出します。ときには自分の思うようにならず、顔を枕に押し付け、泣いた日々もありましたが、それらは留学したからこそ出来た貴重な経験だったと思います。たくさんの人に出会い、助けられ、改めて人の温かさ、そして自分は幸せ者だな、と感ずることが出来ました。これまでお世話になった方々への感謝の気持ちを忘れず、これからは私自身も何かしら誰かの役に立てることをしたいと思います。最後に、私を多方面で助けてくださり、応援してくださった皆様に感謝します。ありがとうございました。



モンタナを出発した朝。13日間、列車で西海岸を旅しました。